

兼岩龍二先生への感謝を籠めまして

米 田 力 生

退官された兼岩龍二先生との思い出をこの度書かせて頂くこととなりました。私が小樽商科大学に赴任して8年間、大変お世話になりました大恩人である兼岩先生との懐かしい日々を、この場をお借りして書かせて頂き感謝の意を表したいと思います。

先ずは、先生の研究に関して紹介させていただきます。ご専門は、数論（すろん, number theory）という分野であります。数論とは数、特に整数およびそれから派生する数の体系（代数体、局所体など）の性質について研究する数学の一分野であり、整数論ともいわれており、ふつうは代数学の一分野とみなされることが多いものでもありまして、おおむね四つ（初等整数論、代数的整数論、解析的整数論、数論幾何学）に分けられます。有名なフェルマーの最終定理

$$x^n + y^n = z^n, (x, y, z \neq 0, n > 2)$$

も代数学の一分野に属します。先生の最終講義に於いてもお話されておりましたが、特に数論的関数の挙動、高階論理の形式的体系というテーマを中心に研究をされておりました。先生とは個人的にご専門に関してお話を詳しくさせて頂く機会が殆ど持てませんでしたが、それを最終講義の場で傍聴させて頂けたことはせめてもの救いでした。しかし他の誰よりも良きお付き合いをさせて頂いた者としては個人的にもっとお話しをお聴かせ頂けなかったことは本当に心残りではあります。

先生は昭和53年12月から平成25年3月までの35年4カ月もの間、小樽

商科大学の屋台骨を支えてこられたことは皆様もご存じかと思われませんが、数学という教科担当ということもあり、10年以上もの間、入試教科委員長という大役も担ってこられました。この業務は他のどの委員よりも色々な心労を伴うものでありまして、先生が晩年体調を崩されておられたのも、そのためではと思われまます。それでも先生は愚痴を言われることも一切なく、いつも感情の起伏も全くあらわされずに努め続けられたことは心より敬服せざるを得ない程でした。本当にお疲れ様でした。

先生と最初にお会いしたのは、私の小樽商科大学採用面接のときでした。先生のご覧になられている前で微分積分導入の模擬講義をさせて頂いたのが、ついこの間のように思い出されます。そして小樽に赴任後、兼岩先生のお宅に招待され赤いドアの建物だという僅かな情報をもとにお伺いさせて頂き、歓迎会を開催頂きました。それが後にも先にも最後の会食になってしまいました。それでも数学という同じ教科担当ということもあり、学内業務では小樽商大での仕事のイロハを一からご指導頂きました。今はそれを先生の後任に指導する立場になり、あらためて先生には大変なご心労をお掛けしていたのだと痛感しております。先生はいつも漂々と何でも熟されていたという印象を持っておりますし、喜怒哀楽を表に全く出されないため、一緒にいる者達は私をはじめとして皆、安心感を持って学内業務に従事することができました。今は先生の気苦勞も段々と理解できるようになってまいりましたが、その度に「有難うございました」という言葉を心の中で呟かせて頂いております。

最終講義の際にも歌をご披露されておりましたが、先生のお宅でもほろ酔いの中、BGM無しに美声を聴かせて頂きました。その他にも、先生は語学にも堪能でして、色々と教えて頂きました。私が記憶していることしましては、アルファベットのxyzは他のものよりも後に付加されたものだという事です。色々と数多くのご趣味をお持ちの先生ですが、お宅の庭に鳥を飼われているし、同じくお庭に研究所という小屋を自らの力のみで建てられたというのですから、それには大変驚愕させられました。先生は小樽商科大学に

おいて長年、基礎数学、経済数学等の講義を開講されておりましたが、時々、その受講生から先生の説明が難しすぎて理解できないという学生が毎年数名おりまして、私はこっそり個別指導させて頂いたのですが、これはいつも先生にお世話になっていたことに対する私からのほんのお礼という気持ちで対応させて頂きました。しかし、逆に私の講義がわからないという学生も恐らく先生にこっそり質問しに行っていたのではと思われまますので、この場をおかりしまして御礼申し上げます。今回、先生との学内での思い出を色々回想してみると、いつもあたたかく影から見守って頂いた心の広い寛大な先生の存在は、私にとっても商大の学生達、卒業生達、多くの本学教職員にとって大きな存在であったということに気付かされると同時に、本学を去られてしまった寂しさがこみ上げてまいります。今後はお身体を大切にお過ごし頂ければと思います。今まで本当に有難うございました。そしてお疲れ様でした。